東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　43：1～17，2017

# アカデミックな言語活動における引用に関する問題
## ― 日本語学習者の口頭発表データから指導方法を考える ―

大津友美・八木真生

【キーワード】口頭発表、引用、日本語学習者、アカデミック日本語

## 1．はじめに

大学でのレポートや論文、口頭発表では、テーマに関する参考文献や資料を集め、それらを理解した上で、引用しつつ考察結果をまとめるということが求められる。引用の際には、自分の考えと引用部分をはっきりと区別し、出典を明らかにするのが基本ルールで、それに反することは深刻な不正行為とみなされる。そのため、論文作成や研究計画作成の教科書などには、必ず引用のしかたについての解説や練習問題が用意されている。にもかかわらず、日本人大学生へのリテラシー教育、留学生へのアカデミック日本語の教育などさまざまな分野で、引用の問題は依然として残っている。

東京外国語大学留学生日本語教育センターでは、「国費学部進学留学生予備教育プログラム」において、日本の国立大学に入学予定の国費留学生に一年間の集中予備教育を行っている。その一年のカリキュラムの中で、1月から2月にかけて「総合日本語」という上級レベルの授業が行われる。総合日本語では、各学生が、それぞれの専攻や興味に応じて研究テーマを選び、それについて4ページ程度の小レポートを仕上げ、その内容について口頭発表を行うが、筆者らが担当した総合日本語の受講生の小レポート、口頭発表にも、学生本人の考えを述べたものなのか、参考文献からの引用なのかが明らかではない部分が多くある。また、引用は、客観的な根拠を示すことで自らの主張を補強するなど特定の目的を持って行われるものであるが、その目的が見えないことも多々ある。

引用の表現については、中級段階の文章表現、口頭表現の授業での学習項目となっている（横田・伊集院，2010；工藤，2013）。にもかかわらず、上級段階でもまだ引用が適切になされないのは、何に問題があるからであろうか。また、それらの問題に対して、どのような指導を考えるべきであろうか。総合日本語の授業回数は全15コマ（週3コマ）、授業期間は6週間程度と短く、学生は短期間で研

究を進め、その成果をまとめなければならない。そのため、引用の指導についても、短期間で効果的に行えるものを考案する必要がある。そこで、筆者らは、実際の学生の最終口頭発表を談話分析することによって、学生の抱える引用に関する問題点を明らかにすることにした。本稿では、その分析結果を報告し、今後に向けて、どう上級段階での指導方法を改善するべきか論じたい。

## 2. 先行研究

### 2.1 不適切な引用

引用とは、「他の人の意見を自分の意見を述べるための論拠にしたり、反対に批判したりするために、自分の論の中で紹介すること」である（浜田他，1997:9）。談話の中でどこまでが他人の意見で、どこからが自説かを明確に区別して示す必要があるが、日本人学生か留学生かにかかわらず、それができない学生は少なくない。留学生や日本人学生がなぜ不適切な引用をしてしまうのか、その原因を明らかにしようとする研究には、山本（2016）、中村他（2016）がある。

山本（2016）は、論文執筆初心者へのインタビューと論文執筆初心者が書いた論文のうち、剽窃が疑われる文章の談話分析を通して、彼らがそのような文章を書いてしまう原因を探っている。分析の結果、「引用そのものに対する認識上の問題」、「引用資料の著者と論文筆者のモダリティ表現の混同」、「論文筆者の解釈のない引用」があるために、論文執筆初心者はそのつもりがなくても剽窃が疑われるような文章を書いてしまうという事態が生じていたことが明らかになった。彼らは、自分が適切に引用していると信じていたり、引用部分と自分の研究テーマがどう関わるかを述べる必要はないなどといった認識を持っていたりする。そして、そういった認識に従って引用するため、談話上にさまざま問題が起こり、自分の意図に反して剽窃が疑われてしまうのである。

中村他（2016）は、留学生や日本人学生による文章中の不適切な引用を分析の対象とし、それらがどう適切な引用の要件から外れているかを考察している。中村他（2016）が適切な引用の要件と考えるものは、佐渡島・吉野（2008）が挙げている引用の目的や場面のことで、適切な引用であるためには、それらの目的や場面に合った内容、形態でなければならないとしている。その目的・場面には、(1) 自分の主張を支持する意見として出し、自らの主張を強化する、(2) 自分の主張と反対の意見として出し、引用内容を打ち消すことで、自らの主張を強化する、(3) 自分が述べていることの具体例として出す、(4) 自分が述べた具体例を解説す

る、(5) これまでとは別の視点を示す、(6) 論点を分析する観点を取り上げる、といったものがある（佐渡島・吉野，2008：74）。中村他（2016）の分析の結果、不適切な引用には、引用部分と自身の主張との関連が不明確であること、直接引用か間接引用かという引用形態の選択が適当ではないこと、引用したデータの質に問題があることなど、さまざまな要素についての不適切性が関わっていることがわかった。そして、このような事態は、学生の、文章全体の構成、論の展開のしかた、引用の目的に対する理解不足から生じているとのことである。

山本（2016）、中村他（2016）に共通していることは、中村他（2016）が述べているとおり、引用の目的や表現など基礎的なレベルからの教育を考えていく必要があると考えている点であろう。引用元の表現をいかに自分の言葉に置き換えるかといった指導法はこれまでにもあったが、それでも剽窃の問題は解決されてこなかったのは、基礎的レベルにおける教育・研究の不足も原因の一つであると山本は述べている（山本 2016：117）。

## 2.2　引用の指導方法

では、適切な引用ができるように、今後、どのような教育を目指せば良いだろうか。

中村他（2016）は、前節で述べた分析結果から、引用に関わる要素として、(1) 必然性のある引用になっているか、(2) 一次情報を引用しているか、(3) 直接引用か間接引用のどちらを選ぶか、(4) 引用元の内容を正確に要約し、文脈や自らの主張との関連がわかるようにしてあるか、(5) 適切な引用形式を用い、引用元、引用範囲がはっきりとわかるようにしてあるか、(6) 文章全体に対する量的なバランスがよく、必要な情報だけが引用されているか、(7) 引用データに適切な解釈が加えられているかがあるとしている。そして、これらの要素を学生に示すだけでなく、文章の全体構成、論の展開のしかた、引用の目的との関連づけを意識化させる指導を考える必要があるとのことである。

中村他（2016）の分析結果を踏まえ、近藤他（2016）は、上述の７つの要素が既存の教科書でどう扱われているか、そしてこれらが文章の全体構成、論の展開のしかた、引用の目的にどう関連づけられているかを調査している。15 種の教材を分析した結果、既存の教材には、上記の７つの要素が網羅的に扱われているものはないことがわかった。また、文章の全体構成、論の展開のしかた、引用の目的とは関連づけられていない説明や練習が多く、レポートや論文全体に対して引

用が持つ意味が学生には伝わりにくいということが明らかになった。以上の結果から、既存の教材にはまだ不十分な点があり、引用の指導法、教材を考え直す必要があることがわかる。

では、レポートや論文の中での引用の位置付けを学生が理解できるようにするためには、具体的にどのような指導法、教材が考えられるであろうか。山本(2016)は、引用・解釈には、(1)中立的引用文、(2)解釈的引用文、(3)引用解釈的叙述文、(4)解釈文の4種の文が関わっており、それらの文の習得が剽窃の防止、論理的展開に繋がると述べている。前節で述べたとおり、論文執筆初心者の引用に関する問題には、引用したにもかかわらず、まるで自分自身の判断であるかのようなモダリティ表現を使ってしまう、何のために引用したのか説明されていない、そもそも引用そのものに対する学生の認識に問題があるということがあり、これらの問題にどう対処するかは従来の指導には含まれてこなかったと山本(2016)は指摘する。そして、上記の4種の引用・解釈文とその機能を学生が正しく理解し、論理展開能力を向上させることが問題解決につながるとしている。ただし、具体的にどのような練習が必要か、どの文をどのような手順で導入するのが良いかについてはまだ示されていないため、更なる研究の進展、教材開発が待たれる。

一方、教師側が指導の手順を工夫することで、学生の引用の問題に対処するということも考えられるであろう。レポートや論文を書くために参考資料を読んでいるうちに、学生の中にはそこに書かれていることが自身の考えであるような錯覚を起こすものがいるが、山本(2006：87-88)は、そういった問題は、参考資料を集める前に、学生が自身の主張を明確にしておくことで防げることが多いと述べている。それは、自分自身の主張がはっきりしていれば、資料はその主張を支えるためのものだと認識することができるからである。レポート・論文指導の早い段階で、学生自身が自らの主張を明確化できるようなステップを用意しておくということが考えられるであろう。また、鎌田(2016)は、大学生の初年次教育や日本語教育の場合には、まずは直接引用を基本に指導するのが良いとしている。鉤括弧やブロック引用時の字下げなど、明示的な表現形式によって自分の意見と他人の意見を区別するということを意識化させることができるからである。何をどの順で導入し、重点的に指導するかを検討することで、学生の引用に対する理解をより効率的に深められる可能性があるであろう。

教師側がレポート課題の出し方を工夫することも重要であろう。井下(2013)は、学生になぜ引用が重要なのかを教えるとともに、参考文献からの情報をそのまま

書き写せば仕上がるような安易な課題の出し方は避けるべきだと述べている。また、成瀬（2016）も同様に、教師の課題の出し方に工夫が必要だと主張している。学生のレベルに合っておらず、与えられた課題の目的が理解できないときに、剽窃の問題が起こるからである。

出典を明記することや、どんな引用形態・表現があるかといったことを教えるだけでは不十分であるということが、上述の先行研究の共通認識であろう。また、それは現場の教師の共通経験でもある。しかし、上に挙げた指導方法や指導手順に関する提案には大いに賛同するものの、実際の教育現場でどのように具現化すれば良いかは、それぞれの現場の条件などに応じて検討が必要である。本研究は、筆者らの実践の場で起こった引用に関わる問題を明らかにし、その結果をもとに、より良い実践に向けて指導方法を検討しようとするものである。

## 3. 研究方法

「総合日本語」授業では、学生たちは自分の専攻や興味に応じて自由に研究テーマを選び、その成果をA4紙4ページ程度の小レポートと10～15分の口頭発表にまとめることになっている[1]。本研究が分析の対象としたのは、筆者らが2013年度、2014年度に担当した「総合日本語」授業の受講生12名分（2013年度5名、2014年度7名）の口頭発表である。発表時間は学生によって異なるが、平均すると約15分であった。

小レポートではなく口頭発表を分析の対象としたのは、以下の理由からである。「総合日本語」授業は、短い期間で行われるため、小レポートは提出しめきりまでのスケジュールが非常に厳しい。そのため、最初から最後まで下書きを完成させてから教師に提出し、添削を受けるという手順ではなく、一部分でも書ければ学生は教師に見せ、その都度指導を受けるという形を取っていた。本来、学生が独力で仕上げた第一稿を分析の対象にするのが適切であろうが、そのようなものは存在しなかった。そこで、それに準じるものとして、単なる原稿読み上げではない口頭発表の談話をデータとすることにした。

口頭発表はすべて録音・録画し、文字化した。また、口頭発表に用いられたスライド、レジュメ、発表の後の質疑応答の内容も参考資料とした。まずは、筆者

[1] この課題の出し方、枚数や発表時間などの条件は、学部進学留学生予備教育プログラムの全クラス、全学生に共通しているため、各クラス担当の教員が裁量でそれを変えることは基本的にできない。

ら2名が別々にレジュメを参照しながら口頭発表の録画をくり返し見て、引用なのかどうかがわかりにくい箇所、引用であることはわかるが引用する目的や表現が不適切であると思われる箇所を特定していった。その後、その結果を付き合わせ、それぞれの箇所について、談話内のどのような特徴が不適切な引用という判断に結びついたのかを検討し、最終的に、単純な言い間違い、パターン化されていない文法・語彙の誤りを除き、データにくり返し現れる問題を洗い出した。そして、その分析結果に基づいて、これまでの教育実践を振り返り、今後どう上級段階での指導方法を改善するべきかを検討した。学生の引用に関わる問題点については第4節で、指導方法の改善案については第5節で論じる。

## 4. 分析と考察：口頭発表に見られた引用に関わる問題

学生たちは、口頭発表における引用の表現については「～によると」「～とのことです」といったものを中級段階で学習している（工藤，2013）。しかし、中級段階での発表テーマは自国の環境問題や人口問題についてで、そこで引用が必要となるのは政府の統計くらいである。ほとんどの情報は学生の出身国・地域ではすでに共通認識となっているようなことがらであるため、引用の表現は必要ない。一方、「総合日本語」の小レポート・口頭発表では、自分が選んだ研究テーマについて、さまざまな文献や資料に当たる必要があり、他人の考えを引用することが避けられない。そのため、中級段階ではそれほど問題にならなかった引用の問題が深刻になってくる。本研究のデータでは、引用に関わる問題としては、次の三つがくり返し観察された。(1) 研究、レポートや論文、口頭発表に対する理解不足から生じる引用の問題、(2) 引用の目的・機能に関わる問題、(3) 引用形式に関わる問題である。それぞれについて、以下に論じる。

### 4.1 研究、レポートや論文、口頭発表に対する理解不足から生じる引用の問題

根本的に、研究とは何か、レポートや論文、口頭発表とはどのような性質の活動かを学生が十分に理解していないことが、引用の問題として現れてくることがある。桑田他（2015：27）によると、「論文」には筆者の主張が必要で、その主張というのは、テーマや問題意識から立てた問いへの答えという形で提示されなければならない。そして、それは論文に限らず、口頭発表にも当てはまることであろう。学生の中には、何が参考資料などからの情報で、何が本人の主張なのかがわからない話し方をする者がいる。一見、それは単にその学生が引用の機能や形式

を理解していなかったり、日本語力の問題があったりするために起こる問題のように見える。しかし、実際はそうではなく、そもそも自分の問いが何なのか、それに対して何を主張したいのかが学生の中で明確化できていないために生じる問題であることがある。

学生Aは、北米と比べてなぜ日本ではカラオケが人気があるのか、関連文献を集め、調査した。しかし、その口頭発表は、さまざまな参考文献への言及があるものの、結局、それらの文献から自分がどう考えたのか、結論らしい結論のないものとなっていた。[例1]は、その発表の終わりの部分である。学生Aは、北米人がカラオケの「二つの役割」(聞き手であるだけでなく、歌い手にもなること)を果たそうとすると人前で歌うことになるが、それは、北米人の習慣に反することだと1～4行目までで述べている。「それはElizabeth Lozanoの考え方です.」と付言しているため、ここまでは引用であることがわかる。しかし、そのLozanoの考え方を学生A自身がどう評価したのか、そこから自分がどう考えたのかが述べられないまま、仲間内だけで個室でカラオケを楽しむ形に発展していった日本とは違い、北米では今もカラオケはバーの一角で行われていると続いていく。そのため、この部分もLozanoからの引用の続きなのか学生A本人の気づきなのかが不明である。その結果、5行目以降で、カラオケの発展のし方も文化も日本とは違うから、北米では日本ほどカラオケの人気は出なかったと、あたかも自分自身の結論づけのように述べているが、これもLozanoの考えを述べているだけのように聞こえてしまい、結局学生A自身の主張は何なのかがわからないまま発表は終わってしまった。

[例1][2]

北米人は、カラオケの二つの役割を受け入れてやったとしたら、どうなりますか？[中略] それは、自分のことを、他の他人に、見られてしまうということです. 他の人に見てもらったりすることは、北米人の習慣を考えると、ちょっと違反していると見られます. それはElizabeth Lozanoの考え方です. では、日本のカラオケ型と北米のカラオケ型、ちょっと見せたい.[写真を見せながら]これ

[2] 例の中で「.」は下降音調を、「？」は上昇音調を表す。また、聞き取りが不正確な部分は丸括弧で囲ってある。角括弧はその他の注記である。本研究で分析対象とした口頭発表の中にはフィラー、言い直し、沈黙などがあったが、本稿で例として示すにあたって、読みやすさを著しく損ねるものについては取り除いた。

は、日本のカラオケ型．カラオケボックスにあり、これは北米のカラオケ型．まだバーにあります．ちょっと発展が違います．文化の考え方も違うから、なぜ北米にはカラオケがあんまり人気が出ないのか？もう少し説明しました．ではこれ以上です．ありがとうございました．

この部分だけを見ると、学生Ａが引用のしかた、自分の意見と他者の意見を区別する方法を知らないためにこのような問題が起こったようにも見える。しかし、口頭発表の冒頭を観察すると、上述の問題は、Ａの問いの立て方が不十分だったために明確な主張ができずに起こったものであることがわかる。口頭発表では、冒頭で、自分の問題意識、そしてそこから立てられた問いをはっきりと提示し、それに答える形で自分の主張を進めていく必要がある。しかし、学生Ａの口頭発表の開始部分には、そのような情報が組み込まれておらず、問いがあいまいなまま調査を開始してしまっていたことがわかる。

［例２］は発表の開始部分であるが、Ａは、１～２行目で、なぜ日本にはカラオケがたくさんあるのか「ちょっと興味がある」と述べているだけで、なぜ興味があるのかはわからない。また、３行目で北米と日本を比較すると述べているが、この学生は北米出身でもないのに、なぜ北米と比較する必要があるのかもはっきりしない。北米と日本との比較をしている先行研究を参考に、自国と日本とを比較するというならまだ話はわかるが、［例１］で示したとおり、そうではない。結局、はっきりと研究のフレームが見えず、話の目的が不明確なまま、「では、カラオケとは何でしょうか？」（４行目）と言って、カラオケの定義に話が移ってしまう。

［例２］

皆さんは、日本に来てから、カラオケに行ったことがありますか？［中略］日本にいる間、なぜカラオケ館がたくさんあるのか、ちょっと興味があります．だから私のテーマは今、日本におけるカラオケの人気．特に北米との比較からです．では、カラオケとは何でしょうか？論文によると、カラオケは、カラとオーケストラという言葉から組み合わせた言葉です．それで、歌がない管弦楽の伴奏で歌ったりする演芸の意味になります．

結局、問題意識も、問いも、その問いに対する答えもない口頭発表である。2.2節でも述べた通り、山本（2006：87-88）は、参考資料を集める前に、学生が自身

の主張を明確にしておくことで、資料は自分の主張を支えるためのものだと認識することができるとしているが、それは本研究の結果からも支持される。 学生Aは、自分自身の中にどのような問題意識があり、そこからどのような問いを立て、それにどう答えるのかを意識していなかったため、ただ資料からの情報を解釈も含めず発してしまったと考えられる。

このような問題に陥りやすいのは、どのようなレポート･口頭発表であろうか。二通・佐藤（2003：107）は、大学生のレポートには、(1) あるテーマについて参考資料などを調べ、自らの考察を加えながら説明するもの、(2) ある問題について、客観的な根拠を提示しつつ、自らの主張、見解、考察などを論理的に述べるもの、(3) ある問題について、インタビュー調査などによってデータを集め分析し、その考察結果を述べるものの三種類があるとしている。筆者らが担当した「総合日本語」における小レポート・口頭発表の課題では、学生が自由に研究テーマを選んで取り組むことができるが、上記三種類のうち、(1) のレポート形式を選択する学生が12名中6名と多かった。そして、本節で報告した問題は、この6名の口頭発表に特に多く見られた。(2) (3) のレポート形式では、出発地点が自分で立てた問いであるのに対して、(1) は参考資料を調べ、テーマについての理解を深めつつ自分なりの問い、考察のポイントを立て、さらなる調査を進めるという特徴を持つ。そのようなプロセスにおいては、山本（2006：87-88）が述べているように、参考文献を読んでいるうちに学生がそこに書かれていることが自分自身の考えであるような錯覚を起こすという事態に陥りやすいのではないかと思われる。

### 4.2　引用の目的・機能に関わる問題

引用は、客観的根拠を示すことで自らの主張を補強する、先行研究の功績を認めた上で、それらと自分の主張とを区別するなどといった目的を持って行われるものである。研究とはどのようなものかを理解し、自らの問題意識や問いを発表の冒頭で明確に話せた学生なら、引用すべきものを、適切な方法で引用できているだろうと思われた。しかし、実際には、そのような学生にも、引用の目的・機能に関わる問題が見られた。

### 4. 2. 1 自らの主張を補強できていない引用

学生Bの研究テーマは日本のアイドルの劣悪な労働環境についてである。[例3][例4]はその口頭発表の一部であるが、どちらの例も、引用によって自らの主張・ポイントを補強するという目的を十分に果たせていないと思われる。[例3]では、アイドルの収入の低さを表す事例として、80％のアイドルが低収入で、他にアルバイトもしていると述べている。証拠として引用するものは、その信頼性が重要である。そのため、単なる推測、小規模のデータに基づいた調査、信ぴょう性の低い情報などは引用すべきでない。波線部がこの情報の出所であるが、この情報だけでは、この引用元の筆者が何というタレント会社のどのような人物なのか、信頼できる人物なのかがわからない。また、どのような方法で行った調査の結果、80％のアイドルが低収入ということがわかったのかも明らかではない。

[例3]

人気があまりないアイドルの収入は低いといわれています．事例は2つ挙げられます．1つ目は、タレント会社のこの、しろがねしょぉむさんによると、日本の専門アイドル声優の中で80％ぐらいの声優は低収入で、他のアルバイトをやらなければなりません.

[例4]も下線部「人気アイドルの忙しさは、一般人より高い」というポイントを補強するために、波線部が示すとおり、文献からの情報を引用している。しかし、この部分は、人気アイドルの忙しさを数値で示したり、しかるべき団体や個人によって行われた調査結果を説明したりするものではなく、ただ睡眠不足などがあるという情報が加わっただけで、「人気アイドルの忙しさは、一般人より高い」という自分のポイントを繰り返しているにすぎず、自らの主張・ポイントを補強するという目的は果たせていない。

[例4]

しかし、人気アイドルの忙しさは、一般人より高いといわれています. ま西洋では、こんな本があります．Idols and Celebrity in Japanese Media Culture. その中で、この本の中で、多くの人気アイドルの仕事が忙しくて、(余暇ずけ) なし、かつ、睡眠不足などであることがよくありますと、えっよくあると、書いてあります.

### 4. 2. 2 引用を必要とする範囲の認識のずれ

引用の形式をとらなければならない情報、とらなくても良い情報それぞれの範囲の認識が誤っているために、引用の形をとるべき内容がそうなっていなかったり、逆に引用の形をとらないのが適切と思われる内容に引用の表現を用いたりしていることがあった。

引用の目的には、先行研究の功績を認めた上で、それらと自分の主張とを区別するということがある。自分の論文や発表の中に他人の研究を利用したら、出典を示す必要があるが、データの中には、学生がその必要性を感じていないと思われるケースがあった。学生Cは日本のストリートファッションの実態を明らかにすることを目的に、ストリートファッションに関するウェブ雑誌の読者モデルなどの写真を分類するという研究をしていた。[例5] は、Cが日本のストリートファッションの歴史について説明しているところである。ここで述べられている情報は、日本のストリートファッションの変遷を概観しているある参考文献に基づいている。しかし、Cは、その出典を明示することなく、「～によると」「～とのことです」といった引用の表現も用いずに、説明を続けている。

[例5]

日本のファッションはー、日本のストリートファッションはどのように進化していくでしょうか？これは、1970年代にアメリカからのトレンドが日本に来て、普及してきました．それとともに、日本の若者たちは、初めて発売されたファッション誌を読むようになって［中略］1989年代に、渋谷センターから渋谷カジというトレンドが、あー発動して、ストリート発という流行が人気になってきました．その後90年代には［後略］

あることがらの歴史的変遷を説明するとき、学生Cだけでなく、複数の学生がこのように引用であることをマークすることなく、まるで自分で資料を調べ、歴史をまとめたかのように話を続けていた。学生Cも他の学生たちも、その他の部分は引用の手続きを踏んで、さまざまな引用形式を用いて話をしているため、この部分についても盗用するつもりは全くないであろう。しかし、多くの学生が歴史的変遷を説明するところで引用の表現形式を使っていないということは、歴史的変遷は引用の対象ではないという認識を学生が持っていた可能性がある。学生の認識では、「歴史＝事実」で、他人のオリジナルの意見ではないため、引用の

形をとる必要がないと思っているのかもしれない。しかし、多くの資料に当たったことで、引用元の筆者はあることがらの歴史を明らかにすることができたのであり、その研究の学界への貢献、功績は認められて当然のものである。たとえ15分程度という短い口頭発表であっても、日本語クラス内での口頭発表であっても、必ず出典が示されなければならないものである。

一方、学生Cの場合とは反対に、引用の形を取る必要がないことがらに引用の形を取っているケースもあった。例えば、テレビのニュースや新聞など、さまざまな情報媒体を通して何度も発信される内容で、すでに広く人々の共通認識となっているようなものの場合は、引用の形を取る必要はない。しかし、そういったものの定義を述べるところで、引用の表現がともに用いられていた。[例2]をもう一度見ていただきたい。学生Aは4行目以降で、「カラオケとは何でしょうか？論文によると、カラオケは、カラとオーケストラという言葉から組み合わせた言葉です．それで、歌がない管弦楽の伴奏で歌ったりする演芸の意味になります.」と自分の研究の対象であるカラオケの語源と定義を述べている。その際、波線部が示すとおり、「～によると」という引用形式を用いているが、カラオケという言葉自体はすでに一般に広く日常的に用いられている言葉であり、定義を述べるのに引用形式を用いる必要はない。学生Aは定義を述べるときには必ず引用が必要であるという認識を持っていた可能性がある。「論文によると」という、著者名や書名が入るべきところに、それが入っておらず、実質的な情報に欠けた引用のしかたから、学生A自身も違和感を感じつつ引用の表現を用いていたのかもしれない。

### 4.3　引用形式に関わる問題：引用中の評価者の無表示

引用のしかたの指導では、必ずと言って良いほど「～によると」「～とのことである」といった表現形式や直接引用、間接引用などの形態の区別について解説される。そのため、言い誤りや単純な文法・語彙的な間違いではない、パターン化された引用形式上の問題は観察されないのではないかと思われたが、本研究のデータにも引用形式に関わる問題が見られた。それは、長い引用の中で、評価の表現が出てきた時、それが引用元の筆者の評価なのか、発表者である学生の評価なのかが明示されないという問題である。

4.1節で述べたとおり、「総合日本語」で学生が書くレポートや口頭発表は、あるテーマについて参考資料などを調べ、自らの考察を加えながら説明するもの

が多い（二通・佐藤，2003：107）。そのようなタイプのレポート・口頭発表では、他人の調査の概要やものごとの仕組みの説明など込み入った内容の説明が含まれることが多くなり、一つ一つの引用部分が比較的長くなると思われる。そのように長い引用部分で自らの評価や意見を差し挟む際には、何らかの方法で、それが引用元の筆者ではなく、自分自身の評価・意見であることを表示する必要がある。しかし、それは学生にとって難しいようである。

学生Ｃは日本のストリートファッションについて発表した。[例 6] は 1 行目で示されているとおり、ジラタナティティーナンという研究者たちの調査結果を説明しているところである。東京の女性がどこからファッションのインスピレーションを受けているのか（感動源）を調べた調査結果である。その中に、波線部「面白いのは～」「～のおかげだと思います」という調査結果に対する評価を示す表現があるのだが、これらの評価が引用元の筆者によるものなのか、学生Ｃによるものなのかがはっきりしない。もしこれらが学生Ｃによる評価なら、「私が面白いと思うのは～」「～のおかげだと私は思います」のように、評価者を何らかの方法で明示する必要があったのではないかと思われる。

[例 6]

ジラタナティティーナンたちは、東京の女性 18 歳から 23 歳の女性に対して、各感動源について評価するアンケートという調査が行ってきました．[中略] こんな結果が出てきました．はい．平均値が 3 以下の感動源は、アニメとか、映画とか [中略] です．これらの感動源は、あまり強い影響を、他者に与えないものです．一方、3 から 4 の値を持つ感動源は、[中略] 店員や友達のスタイルと、通行人と、アーティストです．そして、4 以上の感動源は、ファッション誌とファッションのお店です．面白いのは、2006 年から 26 ％の増加してきたインターネットです．それはなぜかというと、オンラインショップの急成長とか、買い物のするやの、パソコンとかスマートフォンのおかげでファッションの産業が便利になってきました．それはインターネットのおかげだと思います．

## 5. 指導の改善案

データ分析の結果、引用に関わる問題には、(1) 研究、レポートや論文、口頭発表に対する理解不足から生じる引用の問題、(2) 引用の目的・機能に関わる問題、(3) 引用形式に関わる問題があることがわかった。そのうち、(1) の問題は、研究

とは自分の問題意識から出発し、問いを立て、その問いに答えるものであること、そして論文や口頭発表にはそのすべてが含まれなければならないという根本に関わるもので、容易には解決できない。学生の中には、問題意識や問いがあいまいなまま参考文献を読み始め、最後まで研究のフレームが決まらないまま口頭発表をしてしまっていた者もいた。しかし、今後そのような事態を避けるため、以下のように指導を工夫できるのではないだろうか。

第一に、研究の最初から学生に問いを立てることの必要性を意識させることである。特に、自分でアンケート調査や実験を行うのではなく、参考資料などを調べ、自らの考察を加えながら説明するタイプの研究を行う学生には、このプロセスが欠かせないであろう。これまで、「総合日本語」の授業開始前に、研究テーマを選び、アウトラインを書かせるということを長期休暇中の課題として学生各自にさせていた。しかし、今後は、その課題の中に、問題意識や問いも考えて書かせるような工夫が必要であろう。また、いったん問いを立てれば終わりというのではなく、途中で見直させることも重要である。第二に、テーマに関する知識が少ないと、先行研究に引っ張られてしまい、それに対する自分なりの評価が出てこない。そこで、テーマ選びの際に、学生に、ある程度知識を持っているものを選ぶよう事前に指導しておく必要がある。それでもなお、初めて研究をする学生は、ひとたび先行研究を読むと、全面的にそれに賛同してしまうという事態が起こる。そのような場合には、学生との直接的な対話を通して、学生自身の持つ知識や考えを引き出し、先行研究に対するスタンスを明確にする手助けをする必要があろう。

(2) (3) の問題に対しては、引用に焦点を絞った指導、特に、引用の目的や機能を意識化させるための指導を行う必要があるであろう。なぜ引用する必要があるのか、どのような情報を引用すれば自分の主張を補強できるのかということについて学生が考えてみる機会を用意するのが良いであろう。例えば、大島他 (2014：30) には、2つの文章を読んで、説得力があるかどうか、問題があるならどこをどう改善するべきかを検討する練習問題がある。これまで筆者らの授業では、情報検索を扱う回で、実際の書籍、記事、ウェブサイトを比較して、信頼できるものはどれかを検討するという活動はしていた。しかし、文章中の表現を材料にして、信頼性を検討するという活動はしていなかったので、今後、そのような活動も授業に加えたい。併せて、学生の小レポート、口頭発表の中で引用があったときには、その都度、それが文章中のどの考えを補強するものなのかなど、教

師が学生に目的を問い続ける必要もあるであろう。また、データ分析の結果、引用部分が長いときに、その中で自分の評価を差し挟んでいるのか引用元の筆者の評価を述べているのかがはっきりしないという形式上の問題もあった。学生本人が気づいていないだけである可能性もあるので、注意喚起と簡単な練習を用意するようにしたい。

## 6. おわりに

本研究では、「総合日本語」授業における学生の最終口頭発表を談話分析し、彼らの抱える引用の問題点を明らかにした。また、その分析結果に基づいて、今後どう指導方法を改善するべきかについても検討した。中級段階の学習を終えた学生に対して、限られた時間でどのようなアカデミック日本語の指導をすれば学部進学後の学習・研究活動の役に立つのか、今後も引き続き考えていきたい。

## 参考文献


井下千以子（2013）「思考し表現する力を育む学士課程カリキュラムの構築：Writing Across the Curriculum を目指して」関西地区 FD 連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター（編）『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房，pp. 10-30.

大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑朗・岩田夏穂（2014）『ピアで学ぶ大学生の日本語表現［第 2 版］』ひつじ書房

鎌田美千子（2016）「評価の視点から見たパラフレーズの問題―アカデミック・ライティングにおける引用を中心に―」第 40 回アカデミックジャパニーズ研究会発表資料（2016 年 11 月 5 日，龍谷大学）

工藤嘉名子（2013）『アカデミックな口頭表現力を身につける中級口頭表現【2013 年改訂版】』東京外国語大学留学生日本語教育センター（内部印刷）

桑田てるみ・江竜珠緒・押木和子・勝亦あき子・松田ユリ子（2015）『学生のレポート・論文作成トレーニングスキルを学ぶ 21 のワーク』実教出版

近藤裕子・中村かおり・向井留実子（2016）「アカデミック・ライティングにおける引用指導の課題 ―教材分析を通して―」『日本語教育方法研究会誌』23（1），8-9.

佐渡島紗織・吉野亜矢子（2008）『これから研究を書くひとのためのガイドブック』ひつじ書房

中村かおり・近藤裕子・向井留実子（2016）「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」『2016 年日本語教育国際研究大会予稿集』（電子版）

成瀬尚志（2016）「学生の思考力を培うレポート論題の設計」第40回アカデミックジャパニーズ研究会発表資料（2016年11月5日，龍谷大学）
二通信子・佐藤不二子（2003）『留学生のための論理的文章の書き方』スリーエーネットワーク
浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
山本富美子（2006）「タスク・シラバスによる論理的思考力と表現力の養成」門倉正美・筒井洋一・三宅和子（編）『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房，pp. 79-98.
山本富美子（2016）「論文の『意図的ではない剽窃』の問題」『Global Communication』6, 117–132.
横田淳子・伊集院郁子（2010）『大学で必要とされる日本語文章力の習得をめざす初級・中級文章表現』東京外国語大学留学生日本語教育センター（内部印刷）

# Problems identified in Japanese learners' citations:
## How can students learn why and when to cite secondary sources properly?

OTSU Tomomi, YAGI Maki

This study analyses oral presentations made by learners of Japanese, and discusses problems related to the learners' citation of secondary sources. The purpose of this study is to unveil the factors which make the learners' quoting and referencing problematic, and which look like potential wrongful appropriation of another author's ideas or expressions. Through detailed analysis of the discourse of the learners' oral presentations, it was revealed that there are factors which are related to the learners' lack of understanding on what research is and what quotations are. The latter includes the inadequate appreciation of the functional and formal aspects of citations. The pedagogic implications of the improper citation of secondary sources are discussed, and future suggestions for more efficient and effective educational practice are made.